

## 語り・聞き継ぐ6月16~17日 福島浪江町~陸前高田~宮古

浪江町から避難してきた古農さん宅の後片づけボランティアとして、特別に浪江町に入ることができました。3月にパドラーズの総会で古農氏から基調講演をしていただいた縁で実現しました。「まず浪江を見てほしい私の家を見て欲しい」ということを古農氏が講演の中で再三話されていたので、一般の方に声をかけたところ、若い人からも希望がありました。放射能という特殊な事情もありあと幾ばくも無い方で気持ちの若い人を募り行ってきました。



南相馬市に入るとこのような看板が立っていて、福島原発被災地に来たんだと実感してきました。

途中二本松市で浪江町に入る許可証をもらいましたが、同時に放射能を測る線量計も渡されて身の引き締まる思いでした。

浪江町に入る検問所を過ぎると、除染車両のトラックが目につきました。



JR浪江駅前です。市内は地震直後のままで、いたるところで倒壊した家屋が手つかずのまま放置されていて、また見た目には何ともない家でも人が住んでないせいか、心なしか異様な雰囲気を感じられるようで、地震と放射能汚染のダブル震災被害がここにあるのです。時折行政の方々の車や、先ほどの除染作業員の車と警察のパトカーに合うだけで、夜になると宿泊ができないのでパトロールのみが監視用に交代で居残っているそうです。早くこの状態から安心して住める街になって欲しいと思わずにはいられません。帰りたいけど帰れない。帰れるけど心配で帰れないとなると自主避難者として扱われるようだと聞く。なんと不条理なことだろうと。

## 古農さん宅へ



震災から3年3ヶ月経ち、何も変わらないように見える風景もこの場所は「実は田んぼですよ」と聞かされ、自然の野山に変わった歳月の速さに驚かされました。車から出る時にマスク、ゴム手袋、足袋を身に着けて降りました。空気中の放射能よりも下に蓄積された濃度が高いということで準備してきました。古農さんは着いてすぐ墓前に用意してきたお花を手向け、手を合わせていました。ご両親の写真もこの家においてきたそうです。故郷を離れるより自分が20年前に建てた我が家（下の写真）を守って欲しいという思いがあったのであえて置いてきたと話されていました。



生前ご両親が建てた家の写真が飾ってありましたが、今の庭には雑草が生い茂っていて見る影もありませんでした。



家の中は避難直後に空き巣が入り、めぼしいものを探して散らかしほうだいでした。またネズミなどの動物によって家中食い散らかされていました。また冷蔵庫の中は空けると食品などが腐っていて悪臭でひどいのでドアは開けられないそうです。



請戸地区に行ってみました。手つかずのままの現状に復興とは何なのかを考えさせられました。



海岸線4 km先(赤丸)には福島第一原発の4本の塔が見えます。手前のテトラポットも流され、津波の脅威がここにも爪痕として残っていました。

浪江町を後にし、市内を出ようとしたのですが



車、人、持ち物の放射線量を国道沿いのスクリーン場で測ってもらいました。今回の浪江町には正味3時間弱ほどの滞在でしたが、高いところでも $8\mu\text{SV}$ から低いところでも $2\mu\text{SV}$ ぐらいで車や室内では3分の1~2分の1まで下がるようです。単純計算すると平均して $4\mu\text{SV} \times 2.5\text{時間} = 10\mu\text{SV}$ の放射線を浴びた計算になります。目安とすれば胸部のレントゲンが約 $100\mu\text{SV}$ になりますので10分の1ぐらいかと思われます。

ちなみに煙草30本を一年間吸い続けると $98.6\mu\text{SV}$ になるそうです。

生活するうえでがんのリスクが認められる年間被ばく量は $100\text{mSV}$ とされていますので、一日あたりの線量に直すと $273\mu\text{SV}$ となります。国の安全基準の目安として発表された数字は年間 $20\text{mSV}$ とされています。一日に直すと約 $55\mu\text{SV}$ ということですので何ら問題のない数字と思われるのですが、内部被ばくや放射線の種類、除染されない山や森などから蓄積された濃度の高い線量がたまっている沼や川から受けることなども考えなければ判断できないと、専門家によっても意見がまちまちで、安全だという確かなものを示すにはもう少し時間がかかるし、様子を見ないという意見もある中で、避難されている方の思いを考えると、判断の難しさがあることを身に染みて感じてきました。

行ってみなければわからずに事がたくさんありました。ただガイガーカウンターのガアガアピッピの音から解放されることの安心感と放射能が付いたマスクや手袋、足袋をここで処理してもらったことで少し楽になったような気になりましたが、とても複雑の思いで仙台に向かいました。明日は気仙沼を通過して陸前高田、釜石、宮古に行ってみます。



南三陸町の有名な防災対策庁舎の骨組みだけの前には祭壇がおかれ、多くの方々が手を合わせ冥福を祈る姿がそこにありました。3階建ての最上階まで津波が押し寄せた名残がはっきりと感じ取れる状態でした。この建物も取り壊される予定だそうです。いろいろな考えがあると思いますが、手を合わせる場所がまた一つ消えるかと思えば少し寂しい気もしました。



陸前高田市の今の風景です。向かいの山肌を削ってその土砂でかさ上げをする土を運ぶベルトコンベヤーが大蛇のように張り巡らしているのがとても不気味に感じられるのは私だけでしょうか。トラックで運ぶと9年かかるのが1、2年で済むようです。その分早く復興できることはうれしいことです。



津波で被災した海岸線はいたるところで堤防のかさ上げ工事が行われていました。海が見えない堤防は人の暮らしをどう変えるのだろうか考えると心配になってしまいました。



最後は宮古の富士モーターズさんに寄ってお話を聞きました。閉伊川にかかる山田線の壊れた陸橋を見ながら説明をしていただきました。詳細はN06-5にあります羽生氏からの報告をご覧ください。

時間がなく被害が大きかった田老町や浄土ヶ浜には行けませんでした。宮古市全体でも470名の方が亡くなっているそうです。陸橋に向かって手を合わせずにはいられませんでした。今回の語り継ぐ・聞き継ぐは宮古で終了ですがこれからも多くの被災地と秋田を繋ぐ活動をしていこうと思いました。

平成26年6月16日、17日 「語り継ぐ・聞き継ぐ」  
福島浪江町と気仙沼、陸前高田、宮古の視察報告

報告者環境調査担当理事羽生喜一

浪江町から避難されている古農さんの案内で、希望者7名と共に帰還困難地域にある古農さんの自宅及び浪江町、ならびに南三陸町、陸前高田、宮古市などを回ってきました。

古農さんのご自宅を訪問するには浪江町の許可書が必要で二本松市にある浪江町の役場で書類を提出して許可をもらい又線量計を借りて出発、出発した二本松は0.07~0.08マイクロシーベルト/時で有りました  
が帰宅困難地域の警備の方がいらっしやる付近は約2マイクロシーベルト/時でした。

古農さんのご自宅の駐車場に溜まった泥は7~8マイクロシーベルト/時で自宅の回りは5マイクロシーベルト/時、ご自宅の中は2マイクロシーベルト/時でした。立派なご自宅で作業場が3~4か所もあり農器具が置かれたままでした。

ご自宅の中は物が散乱しており、泥棒が金目の物をさがしだすため散らかした物、ネズミが食べ物を食べ散らかした跡、油のペットボトルは誓って中の油を食べるとの事。天井の板が少し歪んでいる所も有ったが、別の家では天井に住み着いたハクビジンの尿で天井が落ちていた所もあるらしい。地震の影響も有り壁にはめ込まれていた姿見の鏡が外れて廊下に倒れ散乱していた。

家の周囲には栽培していたキュウイの畑があり弦は伸び放題だったが支柱もあちこち曲がって幾分キュウイがあるとの事だったが、私には見つけられなかった。家を挟んで道の向こう側には梨畑があるとの事だったが葡萄としてそうですかとうなずく事しか出来なかった。これほどの立派な家を見放して避難しなければならない古農さんは非常に悔しかったと思います。回りの家ももぬけの空で秋田ナンバーを見つけたパトカーが近付いて来て色々職質を受けた。非常にわずらわしかったがこれも盗難防止の為に回っておられるのだと言う事でうなずけた。

波江町を回って見たところ、瓦疎は片づけてあるものの積み上げられているだけで処分はされてはいなかった。岩手県などの瓦疎と違って焼却処分を行ってくれる自治体がないのだろう、早く自前の設備を作って処分せざるを得ないのではないだろうか。

さらに手つかずの状態があり、復興などという言葉は見つからなかった。気仙沼に向かう途中の南三陸町の防災センター前には花が飾られた祭壇があり、その鉄骨ばかりのむき出しの真っ黒な構造物が異様に迫ってきてここで40数名の方が亡くなられたという現実がそれを物がたっているように思われた。

気仙沼では南郷地区のガレキ処理などのボランティアで知り合った鈴木洋子さんの勤めるゴルフ場でおいしいコーヒーとケーキをいただいた。

よく知っている気仙沼を通過して陸前高田の町に入った。巨大なベルトコンベアーの設備が崩した山の土を運ぶため大蛇のようにうねっていた。

総工費120億円で740万立方メートルの土砂を運び陸前高田の中心市街地を最大11メートルかさ上げする予定とのこと。このことだけを見ればすごい設備で復興しているなと感じられるかもしれないがこれが本当の復興なのだろうか、自然に対して凌駕しようとして、勝とうなんて思うことは必ずしっぺ返しがある。宮古市の田老地区の東洋一の防潮堤がよい例だろう。千年に一度の災害を防止するために日常の風景を犠牲にし、監獄に住むような、またはいつもトンネルの中を走っているのでは何の意味もない。海の景色が見えるので海岸

に住む人は多い、海は人間の母といわれるくらい海がもたらす効果は絶大であり、単に海が見えるだけでも大きなものがある。それでは如何に災害に対応すべきか、それはいち早く津波を検知し、いかに早く逃げるかというシステムを作り上げることであろう。昔の人はここより下に住むべからずという石碑を建てたそうだが、時代と共にその対処は異なる。津波を早く検知できるシステムが出来てあろうし、早く、または高く逃げる設備もできるであろう。

人間はどうしても便利な方を取りたがる。仕事のために海岸に近い方に住みたがるし、景色の良いところを求めたがるものだ。老人施設など避難に時間のかかる施設は高台移転がもっともだと思われ、水産加工施設は海岸付近がよい。ただ高台移転と言ってももちろん海が見える方がよいにこしたことはないと思う。

巨額の復興資金が決定したとはいえその使い道として一人当たりの金額や、速度を十分検討できたかが問題である。速度とはその復興施策が出来上がるまでの程度の時間が必要か、せつかく出来上がってもその時点で予想した人数が居るのが問題となるからである。巨大な大蛇を後に宮古市に向かった。

昼を大幅に過ぎていたため駅前の蛇の目という食堂で昼食をとり、三陸海鮮丼やナメタ蝶定食に舌鼓をうって店を出ました。宮古市は震災直後と違って瓦疎もなく整然と復活したかのように見えるが、もちろん今回回らなかった日立浜地区を回ればその痕跡を見ることはできると思う。親戚である自動車ディーラーの富士モーターズに寄って話を聞きました。

「復興してますか」という問いに対して震災後すぐに商売を立ち上げた方と被害が大きすぎた方には商売ができなかった方との差が大きい、すぐに商売ができなかった為に他に仕事を取られてしまい、再開しても売り上げにはつながらないという事のような事でした。幸い富士モーターズは津波で水に浸かったけれど、お客様から預かった車を地震発生直後に高台に移すことをしたために被害が少なく済んだそうです。実は地震発生前にこの訓練をしたばかりで、預かり物の車を流されてしまったディーラーさんもいる中で訓練を生かした副士さんは、いかに訓練が大事かと身に染みたそうです。そのおかげで被害も少なかったし、すぐに中古車の販売が好調だったため大きな損害がなかったとの事でした。我々は宮古市を後に帰秋した。

避難してきている方には自主避難者と立ち入り禁止地域からの強制避難者というわけですが、補償金をもらえる方ともらえない方に分かれ、古農さんも同じで、波江町から避難してきている方で補償金をもらえる方とそうでない方と町内の線引きでそうなっているようです。そこからくる避難者同士の確執などがうまれ、やっかみやねたみなどが発生しているとのことでした。

このことの根本は政府が真実を伝えなかった事からも発しているのだから本来なら自主避難されている方にも生活保障金を支払うべきと考えます。そのためにはいろいろな事情がそれぞれのご家族であると考えられるので、被災者に寄り添った生活支援組織が必要と考えます。何でもかんでも聞くのではなく、個別事情もあるので親身に聞いてあげて、まっとうな判断をお願いしたいと考えます。やっかみなどは被災者同士に向けるのではなく、政府または東電に向けるべきではないでしょうか。

以上